

ESを通じたモデルとライバルの関係構築

～業務と学習のあいだで～

Keyword：リレー

1. 自らの学部生時代を振り返って：互助としてのself-help

1998年の論文「学生互助組織による参画型講座の展開」（経済学教育,18, pp125-130）

立命館大学に国際交流セミナーに1997年度より導入した「Student Assistant」

1997年度から1998年度に引き継ぐ際に掲げた3つのキーワード

- (1)コミュニティ性を意識…1人が志気を下げると誰かの志気も下がってしまう危険性に注意
- (2)コミュニケーションギャップを生んではならない…1人で孤立すれば（中略）拡がらない
- (3)コラボレーションを導かねばならない…参加者が相互に高め合うようなコミュニティを「経験者として参加者の支援を行うこと」（p.129）の意義

橋渡し役として、あくまでも経験者の見地から現地で対応したり、一連の相談役に

2. あるESの語り：曾野部えみさん（国際関係学部4回生）

(1)ES経験

2020年度春学期 学びとキャリア（大講義）

2021年度春学期 学びとキャリア（大講義）

2021年度秋学期 社会と学ぶ課題解決（小集団）

2022年度春学期 学びとキャリア（大講義）

2022年度秋学期 地域参加学習入門（大講義）

(2)ESになった経緯

2019年度春学期に学びとキャリアを受講し、授業で頻繁に発言・発表・ゲストスピーカーへの質問をしていたので、当時のESさんに名前を覚えていただいたことをきっかけに、西山先生からお声かけいただきました。

3. ESの語りから：役割・受講規模の違い・コロナ禍での工夫・制度の充実へ

(1)ESの役割は「架け橋」（翻訳者、通訳者）

→事実を伝える（反復）、その上で教員の意図が伝わるように解釈を示す（言い換え）

(2)小集団では絡んだ糸を解き、大講義では毎回向き合う学生を変える

→教員のアシスタントではなく、学生の（学びの）サポーターとして

(3)コロナ禍でコミュニケーションが不全なときに正解はないことを伝える（選択肢を増やす）

→「I statement」で「少なくとも私は…」を示すことで「あなた」の考えが引き出される

(4)先生が気づかない部分に気づくことができる立場を活かす

→受講生の悩み相談、教員との連絡窓口、手本（かつ切磋琢磨する仲間として）

4. まとめ：経験のバトンリレーが成功するように

(1)輝く受講生に目を向ける（参考：中松義郎「[スジ・ピカ・イキ](#)」あるいは寺谷篤「[ピカ・イキ・スジ](#)」）

ピカッと光る（機知に富む）、イキが良い（気概がある）、スジが通っている（理に合う）

(2)ESには受講生の学びと成長の支援を通じた学びと成長を促す

特に小集団科目では自らの至らなさをリベンジするチャンスとして活用されないように

(3)教員がESを信じて頼ることで授業（クラス）における課題の顕在化を図る

一番熱心な受講生（モデル）として位置づけて受講生からは学びと成長の型（ライバル）に

